

し」とルビが附されていることから、どこかでの講演内容なのか、また著書なのかは不明である。

39) 東京歯科医学専門学校の学制・教科書・教授陣等について

On the Curriculum, Text-Books, Faculties etc.
of the Tokyo Dental College

東京歯科大学 ○長谷川正康

森山 徳長

石川 達也

高添 一郎

金竹 哲也

高山歯科医学院が10年、東京歯科医学院が8年の歴史であったのに較らべて、東京歯科医学専門学校は、1907（明治40）年9月12日付専門学校令による認可を得てから、1946（昭和21）年、戦後の歯科学制改革による旧制大学昇格まで、39年の歴史を積重ねている。

〔校舎の沿革〕 1908（明41）年、臨床講義室、暗室新設と臨床 および 技工実習室の 拡張（計 80 坪）。

1911年、血脇宅をとり壊し講堂、解剖室、基礎学実習室、各研究室、図書室その他を増築。

1914（大3）年血脇歯科医院を閉鎖、改造して校舎に編入。1階実習室、2階臨床実習室とする。

1919（大8）年10月、学校拡張計画を公表。

1921（大10）年7月、鉄筋コンクリート3階建新校舎建築に着手、翌年2月完成し、主として附属病院とした。

1923（大12）年4月、隣接の建物付土地 465 坪を購入。同年9月関東大震災で全建物を焼失。直ちに復旧にかかり、翌13年9月までに、新館修理と東・西仮校舎を完成した。これはあくまで本建築を目指しての仮復興であった。

1928（昭3）年1月本館（鉄筋コンクリート4階建）建築に着手、翌年10月末竣工した（総工費 625,000円）。1930（昭5）年、本館西側に鉄筋2階の別館を建築、その後は戦後まで変化はない。

〔理事者〕 東京歯科医学院発足以来、土地・校舎は血脇守之助個人所有であったが、1920（大9）

年9月、全資産（評価額 456,400円）を寄附し、財団法人組織とする。

理事長血脇守之助、校友中から選挙された理事 5 名、監事 2 名、および評議員 30 名が法人役員となって運営に当るようになった。

後年の大学創設に備えて、私有財産による学校経営を、寄附金による基金募集に移行するための措置であった。

〔学制〕 1905（明38）年2ヶ年半と改正した修業年限を、翌年夏学期を再改正して3ヶ年とし、学年開始を9月とした。

専門学校に昇格後始めての卒業生は、1911（明44）年、指定規則による第1回卒業試験を受け無試験開業の特典を得て卒業した（これは戦後の国家試験時代まで続く。）

1918年の学則の記載によると、1912（大1）年12月には予科を新設すること（5ヶ月）を決め、翌年4月より実施（修業年限3年半）された。

1924（大13）年の学則によると、修業年限は4年となり、学年は4～10月末を前学期とし、それ以後を後学期とした。以後その学制は終戦後まで続けられ、1946年旧制大学発足後、経過措置として1948年まで入学させ、1952年春最終卒業生を送り出した。

以上によって、学科目は大正末期には、高山紀斎が建学当初、立案申請して実際に果せなかった、理想的なカリキュラムがほぼ完成した。

〔付設機関〕 1）校外生制度 毎月1回『歯科学講義』を配布した。

2）1907（明40）年7月1日『私立東京歯科学講習所』を、修業年限2年、午後5～10時の夜間授業により、文部省医術開業歯科試験に受験する学力・資格を与える目的で創立、1910年『私立東京歯科医学校』と改称。1928（昭3）年まで継続した。

〔教授陣〕 1）専門学校昇格時（1907）の専任教授陣は血脇・奥村と水野寛爾・早川可美良・佐藤運雄・花沢鼎であった。

2）1918（大7）年5月の学則の記録では（兼任を含む）、教授——得能文（修身）、渡部善次郎（英語）；井上通夫、永井潜、今裕、中原徳太郎、

二木謙三、綿引朝光（の各医学博士）がそれぞれ組織、解剖、生理、病理、外科、内科、細菌の各科目；医学士福島尚純（口腔外科）DDS 奥村鶴吉（英語・歯牙解剖・歯科治療学）花沢鼎（独逸語・胎生・歯科組織病理）DDS 尾崎稀三（継続架工）大村一男（臨床実習）DDS 川上為次郎（歯科治療学・薬物学・臨床実習）DDS 榎本美彦（矯正）遠藤至六郎（歯科技工学・臨床実習）宇垣錦三（米国留学中）西村豊治（歯科治療・口腔外科・臨床実習）血脇守之助（臨床実習・課外講義）であり、（DDS は外国歯科大学学位保持者）

助教授——安井作太郎（化学・調剤実習）武田讓（歯科治療）佐野実（臨床実習）小野寅之助（組織・病理解剖実習）松井礼七（材料学・歯冠継続架工実習）堀江銑一（歯科技工実習）となっている。また

嘱託——工藤鉄男（課外一法制講義）

助手——（課目は省略）照内昇、黒川誠、高橋寛、矢崎正方、荒井真三郎、斉藤久、風間又四郎、真下武一郎、松本堅太郎、西條良征、遠藤茂と記載されている。

3）1924（大14）年11月の本校要覧には、可成の移動があり、安井作太郎、矢崎正方が教授に、斉藤久が助教授に、中井武一郎が細菌学講師に、正木正が生理学助手になった。

4）1929（昭4）年度、本校要覧の中で目立ったのは、DDS となった遠藤至六郎が薬物学口腔外科兼任教授に変わったこと、治療学教授エル・イ・バトラー、助手杉山不二、充填学助教授福島秀策、補綴学助教授斉藤久および溝上喜久男、講師 DDS の河村弘と渡辺悌、助手光永友紀、北村勝衛、矯正学助教授斉藤久、講師多胡謙治、レントゲン学助教授風間又四郎、口腔衛生学教授奥村鶴吉などである。

5）1940（昭15）年においては、専任144名（教授8、助教授13、講師4、助手64、職員他）、兼任34名となった。

6）1943（昭18）年4月29日付で血脇守之助は勇退し、奥村鶴吉が校長に就任した。

〔教科書〕『新纂歯科学講義』『東京歯科大学専門学校歯科学講義』およびその他の、歯科学報社

から出版された、本校教授陣による『歯科学叢書』およびそれ以後の諸教科書については別に述べる。

『歯科学報』は引続き刊行されたが、1944年戦争のため一時休刊した。

〔同窓会〕1907（明40）年9月東京歯科大学専門学校同窓会と改称、1946年まで継続した。

〔学生会〕1910年11月創立され、カレッジライフを満喫する活潑なクラブ活動を行い、1916年の東京歯科大学創設期成大会の母体となった。

〔大学昇格〕高山紀斎の建学の精神は、また血脇守之助の夢でもあった。1900年、無一物から営々努力して専門学校に仕上げ、1918年の大学昇格期成大会を契機に私財を擲って財団とし、大震災の挫折を乗り越えて1924年には本建築・設備を完成した。日本歯科医界のためにも奔走を惜しまず、老境に至って奥村鶴吉に校長職を譲った。戦後の改革期に、奥村は委員長として歯科教育改革のリーダーとなり、師の夢を実現した。

40) 歯学研鑽について

On “Shigaku-Kensan”

日本大学松戸歯学部 ○坂本 嘉久
江川 裕之
渡辺 有子
谷津 三雄

明治21年榎本積一は修学時代から各門派にかかわらず同学の士を糾合し、相集り談論を交わし、知見の発展を図ることを目的とし「歯科談話会」を設立した。この門戸開放したことが当時新進気鋭の青年歯科医師や書生に広く受け、また榎本積一が明治22年10月、歯科医術開業試験に合格し、翌23年11月に開業したこともあって、更に発展し、その目的に学術研究を含めるようになり、明治23年11月23日に「歯科研究会」と改称し、翌24年1月から130名の会員の機関誌として「歯科研究会録事」を発行した。これがわが国における最初の歯科雑誌である。次いで、「歯科雑誌」はみずほ屋より明治24年9月10日に第1号を、また、伊澤歯科治療所から「歯科攻究彙報」を明治26年